

## 『牧師、閉鎖病棟に入る』

2021年08月09日

日本基督教団の牧師・沼田和也氏が『牧師、閉鎖病棟に入る』を上梓している。タイトルに興味を惹かれ、読んでみた。沼田牧師は牧師をしながら、幼稚園の園長をしていたが、園の事務的仕事に振り回され、パニック状態になり、副園長を叱り飛ばした。それがきっかけになり、精神科の病院に入院した。発達障がいがあり、問題を起こす可能性があるとの診断で、奥さんからも「入院したら」と言われ、意を決して、入院した。その病院は閉鎖病棟で、その病棟での出会い、出来事を多様に書いている。

屈強な男性看護師による虐待、風呂に入る時、全裸の患者たちを女性看護師に見張られる。多様な薬のためか、舌がうまく回らない、尿意で目覚めても、間にあわず漏らしてしまう。沼田牧師は、リストカットで安心する若者が「煙草を吸うのと何が違うのか」と問われ、動物は他を殺して、自分の命を支えているが、「人間はなぜ殺してはダメだと言うのか」などの問いに立たされ、答えに窮し、新たに聖書の言葉に向き合ったと言われる。

閉鎖病棟で入院生活を続ける人々を見て、沼田牧師は下記のように書いている。「彼（入院患者）がここに拘束されているから、世のなかは「まとも」な人たちだけで独占しているのだ。世のなかの「まともさ」を、彼が贖っているのだ。わたしはイエス・キリストによる十字架の贖罪の教理を、はからずも今ここで理解し、その残酷さを悟った。…今、ベッドの上に拘束されている彼は、社会の「まともさ」のためのスケープゴートである。いや、彼だけではない。この病院にいる人たちは皆、世のなかの「まともさ」を贖っている。」この事実が社会的入院をもたらし、何十年と閉鎖病棟で暮らす人々を生み出している。イタリアのある町では精神病院はなくなり、精神を病んだ人たちは皆、社会に受け入れられ、生活しているというニュースを聞いたことがある。沼田牧師は正直な人で、幾多の挫折を経験し、それらを率直に告白し、現在、牧師職を務めている。

以下は、私の経験と感想を書きたい。私は神学校を卒業し、伝道師になってすぐの頃、うつ病になり、入院した。神学校で精神病について多少学んでいたもので、入院への抵抗感は、さほどなかった。大きな病院で「精神科病棟」と言わず、「中病棟」と言われていた特別病棟であった。そこも、当然閉鎖病棟であった。病棟に入ると、背後で「ガチャン」と施錠する音は気分を滅入らせた。きつい薬を飲まされ、ボーとした生活で、沼田牧師ほど、周りの状態を観察できるような状況ではなかった。バッハの「管弦楽組曲」を繰り返し聞いた。閉鎖病棟の小さな窓から抜け出し、山手線に乗っていたのを発見された青年がいた、先日まで、治療していた医者が患者として入院してきた、また、患者たちと外出した時、私を頼って、まとわりついてきたことなどを思い出す。主治医は「必ず治ります」と断言し、断言通り、回復を得た。回復までの不安と苦悩は計り知れないが、この経験は得難いもので、牧会上、大きな力になった。沼田牧師は閉鎖病棟を大げさに捉えているが、精神科病棟は大体閉鎖病棟ではないか。逃亡を防ぐために施錠している。老人の施設が施錠されているのと同じである。私は牧師として、精神科病棟、心療内科クリニックなど、30以上を訪問しただろう。医学には全くの素人であるが、日本の精神科の治療と環境は遅れていると思っている。人権が尊重されているとは思えないことを、再三見せつけられた。

私の場合、「あるべき自分」と「今ある自分」のギャップに悩んできた。今ある、あるがままの自分、それがどんなに弱く、ダメな自分であっても、主イエスの十字架は全てを 수용してくださる。それが「赦し」であり、そこに、生かされていく福音がある。